

《一》次の文章は、宮内泰介の『歩く、見る、聞く 人びとの自然再生』という本の一節である。読んで、後の問いに答えなさい。
(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

自然をめぐる社会のしくみを考えていると、いつも「所有」にぶちあたる。
そもそも、「所有」とはいったい何だろうか？

ビンセント・ヴァン・ゴッホの作品に「医師ガシエの肖像」という絵がある。一八九〇年、ゴッホが死の一ヶ月あまり前に書いた作品だ(ゴッホは三七歳だった)。医師ガシエは、ゴッホを診ていた精神科医。この絵は生前、ゴッホの手によって売られることはなかったが、死後親族によって売られ、その後転々とする。この絵が改めて脚光を^aアびたのは、一九九〇年五月、ニューヨークでおこなわれた競売だった。この競売で、大昭和製紙(現日本製紙)の名誉会長(当時)、齊藤了英氏が八二五〇万ドル(約一二五億円)という高額で落札し、世界を驚かせた。

しかし、世界がもつと驚いたのは購入後、齊藤氏が「おれが死んだら、棺桶にいつしよに入れて焼いてやってくれ」と発言したことだった(『朝日新聞』一九九一年五月一日夕刊)。当然世界中から非難の声が上がる。フランス美術館連盟のジャック・サロワ会長(当時)は「古代エジプトのファラオ(王)たちでさえ、副葬美術品の保存には^bサイシンの注意を払っていた。〔中略〕文化遺産の保護という人類の権利を侵害するものであり、憤激に値する」と批判した(『北海道新聞』一九九一年五月一四日)。

①このエピソードは面白い。世界の人びとはなぜ非難の声を上げたのか。絵を買ったのは齊藤氏だから、^②焼こうが法律的には何の問題もない。ゴッホの絵がこの世からなくなることは、少なくとも人々の生き死には関係ない。

しかし、私たちはゴッホの絵を焼くなど^③だ、という気持ちをもっている。この発言を非難することを要らぬ干渉とは考えない。

つまり私たちはゴッホの絵を「所有」を超えたものと見ているのである。誰が所有していようが、それは人類の財産である、と。所有していなくても、それについて発言したり、あるいは権利を行使したり、利用したりすることがある。

少し考えただけでも、「所有」とは何かという問題は実におもしろい。

たとえば、ある町の景観問題の例を考えてみよう。その住民たちは自分たちの町の町並みを気に入っていて、町並みは自分たちの生活の大事な側面だと考えていた。そこにある鉄塔が建つことになった。住民たちからすれば、明らかにそれは「自分たちの景観」を壊すものだった。単に「好きな景観が壊れる」ということを越えて、自分たちの体の一部が壊されるような感覚すらもつた。住民たちは反対運動に立ち上がる。もちろん景観を「所有」することはできない。しかし、ここには確実に「私たちの景観」という意識が働いている。

④こうした例は無数に考えることができる。たとえば、たまたま^cヒロった小石は自分のものか、家の玄関先に咲く花はその家の人のものか、カフェで先に^dスワった席は自分のものか、子どもは親のものか、自分の体は自分のものか、などなど、「誰々のもの」の問題、「所有」の問題はどこまでも広がりそうだ。

考えてみると、^⑤他人が存在しなければ「所有」も存在しない。この世に自分しかないなければ、「所有」を主張する必要もない。つまり「所有」は、あくまで人間と人間との間の関係である。

広義の「所有」、ということを考えてみると、それは、「人がモノ・コトに及ぼす関係について社会的に承認された。ジョウタイ」^eだと言うことができる。しかし、人がモノ・コトに及ぼす関係も多様だし、それが社会的に承認されるさまも多様だ。法律的な所有、つまり「自由にその所有物の使用、収益及び処分をする権利」(民法第二〇六条)は、実はそうした多様な「所有」のごく一部にすぎない、と見ることができる。

⑥山や川や植物、海洋資源といった自然については、なおさら、その「所有」の幅は大きくなる。「人がモノ・コトに及ぼす関係」には、採取する、植栽する、栽培する、手入れする、保全する、監視する、嗅ぐ、触れる、愛でる、などなど、「使用」という言葉に収まりきらない、多様な関係がある。

また、そうしたかかわりのどこまでが社会的に承認されているのかについても多様だ。処分する権利は認められないが利用は認められる、利用は認められるがそこから収益を得ることは認められない、収益を得ることも認められる、監視する権利を認められる、ものを言う権利を認められる、などなど幅広い。さらにはその認められ方についても、法律で認められている、法律にはないが広く社会的に認められている、その地域だけで認められている、認められているかどうか曖昧などところがある、認める人たちと認めない人たちの間に対立がある、など、これまた幅広い。

自然は所有できない、と言ってしまえば簡単なように見えるが、私たちは自然に対して、ある程度排他的なかかわりを持っている場合が少なくないし、そのかかわりについて社会的な取り決めや承認をしている。「所有」を最大限広義にとれば、私たちは自然を「所有」しているのである。そしてその広義の「所有」には、実に多様ななかかわり、多様な社会的承認が含まれている。

問一 傍線部①「このエピソードは面白い」とあるが、どういう点で「面白い」というのか。次は、それについて説明したものである。空欄を本文中の表現を用いて三十字以内で埋めて、一文を完成させなさい。

ゴッホの絵の所有者である齊藤氏の言動は、
中の所有者ではない人々から非難されたのは当然であると思われる点。

問二 ②には慣用的な表現を踏まえた語句が入る。次のイゝホから最も適切なものを選んで符号を書きなさい。

イ 飾ろうが □ 入れようが ハ 譲ろうが ニ 燃やそうが ホ 煮ようが

問三 ③に入る、「もつてのほかである」という意味で、「道」という漢字を含む四字熟語を書きなさい。

問四 傍線部④「こうした例」とは、どのようなことの例か。三十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部⑤「他人が存在しなければ『所有』も存在しない」とあるが、では、「他人が存在し」て、そこに「所有」が成立するためには何が必要か。簡潔に書きなさい。

問六 傍線部⑥「山や川や植物、海洋資源といった自然については、なおさら、その『所有』の幅は大きくなる」とあるが、自然について「所有」の幅が大きいとは、どういうことか。八十字以内で説明しなさい。

問七 次のイゝホから本文の内容と合致しているものを一つ選んで符号を書きなさい。

- イ 齊藤了英氏はゴッホの「医師ガシエの肖像」を人類の文化遺産保護のために副葬品とすべきであると非難された。
- ロ 人類の財産を保護するという権利の行使である限り、その所有者へのどんな発言も要らぬ干渉とはみなされない。
- ハ 町の景観が変わると、その住民たちの生活の大事な側面や体の一部が壊されることになるので反対運動が起こる。
- ニ 広義の所有の一つとして、自由にその所有物の使用、収益及び処分をする権利という法律的な所有が定められた。
- ホ 自然に対してある程度排他的な関係を持つことは社会的承認を得ており、私たちは自然を所有しているといえる。

問八 傍線部 aゝ e のカタカナを漢字に改めなさい。

《二》次の文章は、大人の「私」がかつて小学校の高学年だった頃のできごとを思い出している話の一部である。読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題は、句読点も一字に数えます。)

「最近、どう？ 楽しいこととか、困ってることとか」

丸い形をした苺のショートケーキを食べながら、①楽さんは私に聞いた。②私の前のお皿には、問題のサヴァランが。この店のサヴァランには、クリームではなくフルーツが使われていた。苺とキウイと洋梨とブルーベリー。とにかくフルーツが好きだったから、ふたつの中からサヴァランを選んだのは私だった。私たちは目の前に出されたケーキを交換した。おぼさんは当然私がショートケーキを食べるものだと思って、私の前にそれをおいてくれたのに。きつとガラスケースの中にはケーキの説明書きがあつて、アルコール表示がきちんとしていたのだと思う。父はそれを見落としたのだ。

ひと口食べた瞬間に、お酒の染みこんだケーキだと分かった。口の中がじんわり熱くなってくる。ふいに、教室のガタガタする椅子を思い出した。こういう時、「困ってるんです」と言い出せない。

食べられないことはないの、まあいいかと思ひながら、十歳の私はせつせとサヴァランを食べる。食べながら、楽さんの質問に答える。

「楽しいことは、クリスマス会の準備かな。困っていることは……サンタクロースのこととか」

「サンタクロースかあ」

楽さんは私の顔をうかがうように、

「③きみには、まだ魔法がかかっているのかな」

楽さんが何を言おうとしているのかは、すぐに分かった。素敵な表現だと思った。でも、残念ながら魔法はすでに解けている。

「二年生までは、ママがサンタだったよ。もう引退したけど」

「引退」

楽さんはくすつと笑って、優雅な仕草で紅茶を飲んだ。

その時、楽さんが左手の薬指に指輪をしていることに気がついた。だけど私は「大人のふりをしたい子ども」だったので、見なかったふりをして話を続ける。

「クラスにまだサンタを信じてる女子がいるんだけど」

「うん」

「南野さんがね」

「その子がサンタを信じてる子？」

「違う、別の子。南野さんってね、いつもかわいい服着てるんだよ。大きい犬も飼ってるし」

「ふうむ。人気者？」

「そう、クラスで一番目立ってる子。でね、南野さんが、本当にサンタがいるっていうなら、次のクリスマスに証拠を見せてって、

その子に言ったの」

「南野さんは、いないって？ サンタ」

「そう。そんなのがいたら、フハウシンニウだって」

「やっかいな子だな。それでどうなった？」

「泣いちゃった、その子」

楽さんは苦笑した。「それで、きみはどうしたの」

「まだ信じてる子にそんなこと言っちゃだめなんだよって、あとで南野さんに注意しといた」

「大人だな」

「でもしたら、口きいてくれなくなっちゃって」

「だろうね」

「口きいてくれないと、口きかせたくなるんだよね」

「きみのママもそういうタイプだったよ」

④楽さんは頬杖をついて、「サンタ問題は深刻だな」とつぶやいた。

「南野さんって子はさ、きつとまだ信じていたかったんだよ、サンタがいるって。だから、まだ信じている子が近くにいたことが悔しくて、つい意地悪したくなっちゃったんじゃないかな。分かる気もするよ」

「⑤分かるの？」

「⑥人の夢がうつとうしく思えることって、たまにあるから」

楽さんは最後に残っていたケーキの苺を口に入れた。

うちのママはショートケーキの苺をいつも最初に食べる。好きなものは残さず先に食べるのだ。楽さんはママとは違って、きつと好きなものを最後までとっておくタイプなんだろう。楽さんは「うん、うまい」と言った。

そして次に楽さんが言ったこと。それを聞いた時の、世界の色が突然にバツと変わったような、特別なあの気持ちは忘れられない。

「苺って、すっぱくてちよつと苦手なんだ。だからつい、最後まで残してしまう」

「えっ。苦手なの？ 苺が？」

「うん。でも、これは甘かったなあ」

ああそうか、苺が好きなものとは限らないんだ。そうじゃない人だっているんだ。

好きだから最後に残したって、そう思いこんでしまった自分に私はとても驚いた。当たり前のことを大発見したような幸せな気分と、思いこみで人を決めつけてしまった後ろめたさ。甘さと苦さを上手に混ぜたようなあと味。その気持ちは、まさにサヴァランにぴったりだった。

「甘かったなあ」

言い方をまねてつぶやくと、楽さんは「それはよかった」って、⑦とんちんかんな返事をしたのだった。

(戸森しるこ「サヴァランの思い出」より)

問一 傍線部①「楽さん」は「私」にとってどのような人物だと考えられるか。次のイ、ホから適切なものを一つ選んで符号を書きなさい。

イ 「私」の年の離れた姉。

ロ 「私」の母親の元夫。

ハ 「私」の父親の恋人。

ニ 「私」の幼なじみの父親。

ホ 「私」の年の離れた恋人。

問二 傍線部②「私の前のお皿には、問題のサヴァランが」とあるが、どのような問題があるか、説明しなさい。

問三 傍線部③「きみには、まだ魔法がかかっているのかな」とあるが、ここで言う「魔法がかかっている」とはどういうことをさしているか、説明しなさい。

問四 傍線部④「楽さんは頼杖をついて、『サンタ問題は深刻だな』とつぶやいた」とあるが、「楽さん」はなぜ「深刻だ」といったのだと考えられるか。その説明として次のイ、ホから最も適切なものを選んで符号を書きなさい。

イ 「私」がどんなことを言ったとしても、多分怒った南野さんは頑なな姿勢を崩そうとしないだろうから。

ロ サンタに関しては特に思い入れのある「私」が折れることはないだろうということが分かっているから。

ハ 南野さんがクラスの中で次々とけんかを始めるせいで、クラスの雰囲気が悪くなり、迷惑しているから。

ニ 南野さんと「私」との対立を何とか解消させたいが、話を聞けば聞くほど難しい事のように思えるから。

ホ サンタの存在に関する考えの違いで生じた対立は、誰かが考えを改めてすませるべき問題ではないから。

問五 傍線部⑤⑥のやりとりについての説明として、次のイ、ホから最も適切なものを選んで符号を書きなさい。

イ 南野さんの考え方に理解を示そうとする楽さんを「私」が疑っているのに対し、自分の嘘を見抜かれそうになった楽さんが、嘘を夢に言い換えてごまかそうとしている。

ロ 自分に口をきいてくれない南野さんに味方するような楽さんを責めるような「私」に対し、自分の夢に踏み込まれたくない楽さんはあえて突き放そうとしている。

ハ 現実的な考え方をする南野さんとも仲良くしたい「私」に対し、楽さんは現実と夢との折り合いをつけるのは大人でも難しいということ論そうとしている。

ニ 人の夢を攻撃することに批判的な「私」に対し、楽さんは夢についての独特の見解を提示しつつ、夢を信じている子に攻撃的になってしまう南野さんの気持ちに理解を示そうとしている。

ホ クラスで一番目立つ南野さんには楽さんまでも従ってしまうのかと疑う「私」に対し、楽さんは、対立する相手とも、視点を変えればわかり合えることを伝えようとしている。

問六 傍線部⑦「とんちんかんな返事をしたのだった」とあるが、どのようなところが「とんちんかん」だったと言えるのか、説明しなさい。

問七 この文章のタイトルの「サヴァランの思い出」とは、「私」にとってどのような意味を持つ思い出か。百二十字以内で説明しなさい。

〈四十五点〉

《三》 次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 児童の感受性をハグクむ取り組み。
- ② 墓前に花をソナえて、手を合わせた。
- ③ すべての公務員にはシュヒ義務がある。
- ④ 地域活性化のため地元商店街は色々な策をコウじた。
- ⑤ 美術の先生が、近くの画廊で初めてのコテンを開いた。
- ⑥ 彼女は日本スケート界のシホウともいえる存在である。
- ⑦ インターネットのコウザイについて、クラスで話し合う。
- ⑧ カロウがたたって体調を崩し、とうとう入院してしまった。
- ⑨ このテーマはケントウに値する、大切なことだと思われる。
- ⑩ 彼がこれまでにしてきたことは、大きなハイトク行為である。
- ⑪ 彼の今後のキョシュウについて、世間の興味が集まっている。
- ⑫ 彼の考え方のコンカンにあるのは、自由を尊重する気持ちである。
- ⑬ 王は手柄をたてた兵士にほうびを与えようとしたが、彼はコジした。
- ⑭ この短編集にツウテイするテーマは、表面的に読んでいてはわからない。
- ⑮ 記録を塗るかえられたことは、自分の実力からするとボウガイの喜びであります。

〈十五点〉

